

Title	巡礼功德譚のダイナミズム：四国遍路「尻なし貝」物語を事例として
Sub Title	The dynamism in pilgrims tales : the case of Shikoku Henro pilgrims, the Tale of Shirinashi-gai (snails with their tips lost)
Author	浅川, 泰宏(Asakawa, Yasuhiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2002
Jtitle	哲學 No.107 (2002. 1) ,p.131- 167
JaLC DOI	
Abstract	Pilgrims tales, the series of folk tales related to certain pilgrims, represent the concept of pilgrims and play a role to attract people to pilgrimage. The author of this paper sets pilgrims tales as a framework for trying to introduce the result of folk tales research into the study on pilgrimage. The paper also searches the possibility to make a dynamic approach on pilgrims tales, compared to the major studies on folk tales in the past that took static approach such as typification and structural analysis. The main topic in the paper is to discuss the meaning of pilgrimage and the changes in the environment based on the transition of pilgrim tales. Taking the example of "the Tale of Shirinashigai" compiled in "Shikoku Henro Kudoku-ki (Shikoku Henro blessing stories)" issued in 1690 in the Edo era, the paper confirms that information about Shikoku Henro is shared by many people through mass media including books and plays, then analyzes the development of pilgrims action followed by the changes in transportation system and the meaning of Shikoku Henro, based on the result of fieldworks.
Notes	特集文化人類学の現代的課題 論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000107-0134">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000107-0134</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 巡礼功德譚のダイナミズム

—四国遍路「尻なし貝」物語を事例として—

— 浅 川 泰 宏\*

## **The Dynamism in Pilgrims Tales: The Case of *Shikoku Henro Pilgrims*, the Tale of *Shirinashi-gai* (snails with their tips lost)**

**ASAKAWA Yasuhiro**

Pilgrims tales, the series of folk tales related to certain pilgrims, represent the concept of pilgrims and play a role to attract people to pilgrimage. The author of this paper sets pilgrims tales as a framework for trying to introduce the result of folk tales research into the study on pilgrimage. The paper also searches the possibility to make a dynamic approach on pilgrims tales, compared to the major studies on folk tales in the past that took static approach such as typification and structural analysis.

The main topic in the paper is to discuss the meaning of pilgrimage and the changes in the environment based on the transition of pilgrim tales. Taking the example of “the Tale of *Shirinashi-gai*” compiled in “*Shikoku Henro Kudoku-ki (Shikoku Henro blessing stories)*” issued in 1690 in the Edo era, the paper confirms that information about *Shikoku Henro* is shared by many people through mass media including books and plays, then analyzes the development of pilgrims action followed by the changes in transportation system and the meaning of *Shikoku Henro*, based on the result of fieldworks.

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

## 1. 序論：「巡礼功德譚」巡礼研究と口頭伝承研究との結節点

### 1. 口頭伝承と巡礼功德譚

高僧や神仏、あるいはそれらに関連する宗教的行為などにまつわる功德譚・靈験譚などを含む、口頭伝承の研究は、日本民俗学、文化人類学、国文学などの諸領域において重要な位置を占めてきた。このうち日本民俗学では柳田国男や関敬吾を初めとする、多くの研究者がこれらの物語の収集・分析を手がけており、その成果は『日本伝説大系』(1982～1990)や『日本昔話大成』(1978～1980)などの膨大な資料群に結実している。

通常、民俗学においては、口頭伝承には神話、伝説、昔話、世間話などの下位分類がある。功德譚・靈験譚はこの枠組みでは、主題が「聖なるコト・モノの由来」であり、伝承意識として「信すべきコト（信仰行為）」を持つ〔福田晃 2000 5, 7〕「伝説」にもっとも近い。一般に伝説は「土地に根ざした形で伝承され」「集団の一員としての社会性、アイデンティティの獲得を第一義とする」機能を有するという『日本民俗大辞典』における花部英雄の説明が示すように、主に定住の共同体を念頭において説明される。しかし、靈験譚・功德譚が語られる現場には、このような定住を前提としない場合もある。例えば巡礼がその典型といえよう。巡礼は宗教性を帯びた移動の形態である。数ある旅の形のなかでも、程度の差はあれ神仏の靈験功德を求めるものを大枠で「巡礼」と定義しても、そう違和感はあるまい。ならば、巡礼に関する伝説は移動性と不可分に考える必要があるのではないか。

筆者が今、最も関心を寄せている巡礼である四国遍路に関連する伝説を取り上げた論考として、武田明の四国における大師信仰の研究〔武田 1969 28～71〕、真野俊和による『四国徧礼功德記』の分析〔真野 1991 (1978) 118～144〕、あるいは宮田登の大師信仰一般に関する研究〔宮田 1971 97～137〕などがあるが、それらは構造分析や類型化などが主であ

り、このようなダイナミズムは必ずしも明確に意識されてきたとは言い難い<sup>1</sup>。更にこれらの諸研究には、それぞれ重要な成果であったと考えるが、少なくとも20年以上前のものであり、新しい方向性が企画されても良いのではないだろうか。

そこで本稿では、移動性に基づくダイナミズムを考慮した「巡礼功德譚」という枠組みを設定し、その可能性について考えてみたい。ここでいう巡礼功德譚とは“伝説”の一特殊形態である。字義通り「巡礼に関する功德を説く物語」であり、それも巡礼一般というよりも、ある特定の巡礼とその功德という具体的な関係性を持つものを取りあえず想定しておく。この時、巡礼功德譚は、当該巡礼の意味世界を表象し、同時に受容者をその巡礼に赴かせる動機付けになるような機能を有する（あるいは期待される）と言えよう。この意味で、巡礼功德譚は寺社や巡礼路といったハードウェアと同様、一種のソフトウェアとして巡礼のシステムの要素をなすものである。

## 2. 巡礼功德譚のダイナミズムとその可能性

巡礼功德譚にはいくつかの動的な性質が考えられる。具体的な検討は本論で行うとして、ここでは理論的に考え得る基本的な性格を確認しておきたい。

第一には「再帰性 (reflectivity)」があげられる。何らかのきっかけで生まれた功德譚が、ある巡礼と関連づけられることで、当該巡礼の功德を具体的に伝達する巡礼功德譚として成立する。その物語の受容者の一部が、新たな巡礼者となってその巡礼地に赴く。そしてそのうちの幾人かがその功德をより確かなものとして、再び巡礼体系に差し戻し、また新たな巡礼者獲得の為に再利用される。このように繰り返し語り継がれること

<sup>1</sup> そんな中、真野俊和には伝説の伝搬者に着目した興味深い論考「弘法大師の母」〔真野 1991 91～117〕がある。

で、巡礼功德譚は生命を保つ。もし何らかの事情によってその功德が成立しなくなったとき、物語は消滅の危機に瀕する可能性もある。また、伝承過程においてなんらかの変容が起こりうる可能性もあるだろう。第二には「拡散性(diffusion)」があげられる。巡礼者は移動する。この時彼らは共同体から共同体を渡り歩く文化伝搬者でもある。その伝搬されるもののなかに情報がある。巡礼功德譚もそのような情報に他ならない。こうして、巡礼功德譚は巡礼者の移動と共に拡散していく。つまり、巡礼功德譚は時間と空間をダイナミックに動くソフトウェアとして理解できる。

これらの基本的性質からその研究には次のような可能性が考えられる。ある巡礼功德譚の表象に着目することで、その巡礼全体の意味性の抽出が可能になるだろう。また、伝説の変容や消滅からは、同じようにその巡礼全体の意味性の変容・消滅が探り出されるかもしれない。さらに拡散性の分析からは、その功德譚の伝播経路や仕組み、担い手が見えてくる可能性もある。そして、もしこれらの分析が有効であるならば、蓄積の深い民間の口頭伝承研究の成果を、その他の移動に関わる諸領域に応用できるような道があるのではないか。本稿は巡礼研究の立場からの口頭伝承研究の方向性・可能性を探るひとつの試みでもある。

## 2. 民衆型四国遍路の確立：特にメディア空間の成立に関して

### 1. 「四国八十八箇所」の成立と「功德記」

巡礼功德譚についてのこのような観点から四国遍路とそれにまつわる物語を振り返ったとき、一つ着目すべき文献がある。『四国徧礼<sup>へんろ</sup>功德記』(1690年刊)という書物で、主に17世紀後半に活躍した宥弁真念という僧が、ガイドブック『四国遍路道指南』(1687)、霊場由来記『四国徧礼<sup>へんろ</sup>霊場記』(1689)、と合わせた“真念シリーズ”とでも言うべき書物群のひとつとして刊行したものである(以下それぞれ「功德記」「道指南」「霊場

記」と略記)<sup>2</sup>。この物語集の成立当時、四国遍路はそれまでの修行者が中心であった四国辺地修行的なものから、民衆中心のものへと移行する最終段階にあった。

われらが修行せし様は、忍辱袈裟をば肩に掛け、衣はいつ  
となく潮垂れて、四国の辺地をぞ常に踏む〔梁塵秘抄〕

大師御辺路の道法は四百八十八里といひつたふ。往古ハ横  
堂のこりなくおがみめぐり給ひ、峻険をしのぎ、谷ふかきく  
づ屋まで…今ハ劣根僅に八十八ヶの札所ばかり計巡拝し、往  
還の大道に手を拱<sup>こまぬく</sup>御代なれば、三百有余里の道のりとなり  
ぬ〔道指南 115〕

中世的な四国辺地の世界を端的に現す梁塵秘抄に対し、「道指南」が示すのは、巡る対象を札所寺院に限定したことによる道のりの縮減、これに交通事情の改善なども手伝って、苦行性が薄められた「四国八十八カ所順拝」とでもいうべき大衆型の巡礼体系の成立である。一般に 17 世紀頃は巡礼が大衆化した時期である<sup>3</sup>が、四国遍路も「道指南」のいう「うゐ参の翁、にしひがししらぬ女わらべ〔同 115〕」でも巡拝可能な霊場へと変貌を遂げつつあった。この四国遍路の民衆化に尽力したのが他ならぬ真念その人であり、彼は協力者を募り、しるべ石や宿泊施設を設置したり、書物を出版したりと精力的な活動を行った。そのような諸活動の中でほぼ最後の仕事にあたるのが「功德記」の編纂事業であった。

<sup>2</sup> 「霊場記」の著者は寂本という高野山の学僧であるが、これらの書物群は真念の企画によるものであり、その意味でここでは「真念シリーズ」と称している。なお、これらは、近藤喜博〔近藤 1973, 1974〕と、伊予史談会〔伊予史談会 1997〕によって翻刻されている。本稿では両者を併用したが、典拠にはより参照しやすい後者のページ番号を記した。

<sup>3</sup> この辺りの事情については、新城 1982 の第 6 章以降が詳しい。

「功德記」は遍路をする功德、遍路に施す功德（またはその逆）などについて書かれた「巡礼功德譚」集である。真念が各地で聞き書きしたものと思われる24編の物語からなり、庶民的な視点と記述の具体性を特徴とする。庶民性については、同書の監修者とも言うべき寂本が序文によせた「予、この巻を見るに庸俗の物がたりにて法教の義談にあらず、却て人のあざけりをまねくものならし、さはいえど、人に賢愚あり、…ひききものにハあさき教をしめす事になんありける。いまの物がたりも庸人の耳にはやくかなひ、信を発し仏にちかずかば、深教に勝れかんかし〔功德記212〕」というコメントが端的に物語っている<sup>4</sup>。また記述の具体性に関しては、例えば第1話<sup>5</sup>「土州高岡郡仁井田の庄窪川村といふ所に、弥助といふ人あり。貞享年中の事なるに…〔功德記214〕」のように、いつ、どこで、だれが、という状況が具体的に説明されているものが目につく。さらに登場人物には出版時の同時代人が多く、このリアルさが巡礼体系への参加の動機付けとしての機能をより説得力のあるものにしているといえよう。

## 2. 近世マスメディアにみる遍路情報の社会化：言説空間の成立

### 「道指南」の流通

ところで、これらの書物群はそれ以前の決して多いとは言えない関連書物類とは異なり、不特定多数の読者を想定して書かれたマスメディアであった。このことを、真野俊和は四国遍路信仰史上、「画期的な“事件”」と評している〔真野1991 118〕。ここで巡礼功德譚の分析に入る前に、

<sup>4</sup> これらの物語は「霊場記」作成時に、寂本の「浮説妖妄にわたる事はいまのとらざる所なり〔霊場記120〕」という編集方針の結果、切り捨てられたものである。それらが、真念のたつての意向により、「功德記」で日の目を見ることになったのである。

<sup>5</sup> 「功德記」にはこのような番号はないが、便宜上、近藤喜博による釈文を参考に第何話と称する。

そのような情報が十分に社会的に共有されることを可能にする場、すなわち四国遍路に関する言説空間の確立を、これらの諸メディアの流通や隆盛から確認しておきたい。

真念シリーズの版元は大坂であるが、その流通場所はそこに留まらない。例えば「道指南」は大坂心斎橋北久太郎町の本屋平兵衛、同所江戸堀の阿波屋勘左衛門、阿波徳島新町信濃屋理右衛門、讃岐丸亀塩飽町鍋屋伊兵衛、伊予宇和島満願寺で配布していたとその奥付にある。この阿波屋勘左右衛門は大坂から徳島に渡る遍路の窓口であり、大坂を経由して四国に入る遍路達は、ここで事前に「道指南」を入手できたということになる。更に「功德記」では高野山と土佐種崎町が頒布所に加わり、その流通場所は広く阿土予讃の四州と大坂、高野山と遍路にとってはゆかりの地域を網羅している。

なかでも「道指南」は貞享4年(1687)の出版後、1年間で3回の版を重ねる程の人気であった。同書の影印・釈文を収めた『四国霊場記集別冊』の編集にあたった近藤喜博はこの増刷に関して「驚異的な需要」と述べ、さらに「版木の減り具合から考えると、改訂三版のままにて相当多量に刷った結果と思われる」と指摘、さらに後年の改刻版に「貞享の板磨滅して、文字不分明により、今復梓をあらたむるもの也」と追記されているのを紹介して、このガイドブックの好調な売れ行きと、当時の四国遍路の盛況ぶりを論証している〔近藤喜博 1974 517～518, 524〕。更に刊行年がわかっているだけで、1697(元禄10)、1767(明和4)年、1807(文化4)、1814(文化11)、1815(文化12)、1836(天保7)と改訂・増刷を繰り返し、この流れは実に明治期まで繋がっていく。

この他、「霊場記」も1752(宝暦2)年版や刊行不明の増刷本がある〔近藤 1973 解説 26〕。「功德記」に関しては増刷、改版の情報はないが、収録された個々の功德譚については、後に示すように、案内本や体験記などに取り入れられる形で語り継がれてきたものも少なくはなかった。



かっぱずいえき

### 甲把瑞繹「仁井田之社鎮座伝記」

近世期を通じて増刷を繰り返した「道指南」が、どの程度遍路者達に行き渡っていたかを知ることができる興味深い資料として、高知県窪川町に伝わる甲把瑞繹(1737～1803)の「仁井田之社鎮座伝記<sup>6</sup>」の次の一説を紹介したい。

…貞享年中摂江に心念といへる金銀飽く迄満て智恵不足せる無道心が、辺路に成りて道知便と云双紙を梓行してより、蠢々の愚俗は是が妄説に惑ハされて、挙国て是を語伝へ遠国より波涛凌き廻国四国順礼を志し千里を遠しとせず来る信心の徒か彼草紙を懷中にし来り…

文中の“心念”は明らかに“真念”であり、“道知便”は“道指南”である。著者瑞繹は窪川の医師で、実験を重んじ、科学的な医学研究の道を開いた吉益東洞の門弟であった〔高知県人物事典 210〕。仁井田五社（現・高岡神社）は当時の四国霊場 37 番札所であるが、一方で瑞繹にとっては地元の由緒ある神社そのものである。その為、遍路達が向かって右から大宮、今大神宮、中宮、今宮、聖宮（森ノ宮）とある五社のうち「中宮にのみ納札を収め左右の四社へは見向きもせず、況や拝礼をや」という状況を、「大いなるひが事」と憤慨しているのである。引用箇所はその直前の部分であるが、彼はそのような状況の責を、多分に誤解と偏見に満ちた物言いで、遍路達が携えている「道指南」とその著者真念に押しつける。だが、この叙述は瑞繹の意図とは全く別に、「道指南」（正確には後世の改訂本）が如何に多くの、そして遠国の遍路達に流布していたかとい

<sup>6</sup> 窪川町立図書館所蔵の複写本を、戸田貞徳氏の翻刻ノートと合わせて参照した。なお原文では“瑞益”となっているが、ここでは『高知県人物事典』の記載に準じた。

うことを、地元の視点からそして四国遍路の外部の立場から言及した極めて重要な資料である。

### 『四国徧礼絵図』

また、書物以外の関連メディアとしては絵図がある。案内記に遅れて1763（宝暦13）年、細田周英の手による『四国徧礼絵図』が刊行される。周英は絵図作成の動機として「…延享四年の春、真念の道しるべを手鏡として大師の遺跡を拝礼せしに、西国三十三所順礼には絵図あれども四国徧礼にはなきことを惜しんで畧図となし…普く徧礼の手引にもなれかしと願ふものぞかし」と図中に記している。彼もまた「道指南」を手に遍路に赴いた一人であったのである。

絵図と案内書はそれぞれに相補的なメディアとして関連づけられていた。「道指南」の後継本である1767（明和4）年版『四国徧礼道指南増補大成』（以下「増補大成」）にも「四国徧礼再見図」の記載があり、「四国徧礼細見図 折本壺冊 御城下国境名所旧跡くさぐさ、具絵図にあらはし候。御求可被下候」と合わせての購入を勧めている<sup>7</sup>。また絵図の側でも、大坂心斎橋の大坂書林、佐々井治郎右衛門が出した1807（文化4）年の版には、「道指南」の紹介がある<sup>8</sup>。岩村武勇によると、この大坂書林は案内書の版元でもあり、文化年間に「増補大成」やその類書を少なくとも4回刊行している〔岩村1973 解説〕。

これらの絵図も好評を博したらしく、いくつかのタイプに分かれながら、案内記ともども大坂を中心に増刷された<sup>9</sup>。また周英の絵図は大坂で出版されたものだが、その系譜を引く版本は各所に伝播し、近世後期には例えば愛媛の笹山権現遙拝所や40番観自在寺でも販売されていた<sup>10</sup>他、

<sup>7</sup>〔近藤1974〕に収録の影印を参照。引用部は449ページ。

<sup>8</sup>『四国徧礼絵図』1807（文化4）刊。人文社発行の複製品を参照。

<sup>9</sup>このうち派生系のものを含めた22枚の絵図を〔岩村武勇1973〕で確認することができる。

43 番明石寺茶道，宇和島，讃岐金比羅などが版元のものもあった〔岩村 1973 第 3, 15, 16, 20, 21, 23 図〕。

また絵図の用途は実用面だけではなかった。田中智彦は絵図の弘法大師像に着目し，その向きによって周英系の A 様式と，派生系の B 様式に分けた。A 様式は「くさぐさ<sup>つぶさに</sup>具」とあったように，実用に耐える道中の詳細な情報が盛り込まれているが，B 様式では A 様式を踏襲しながらも，これらの諸情報が極端に減り，また紙面も約半分と簡略化している<sup>11</sup>。しかしながら，絵図の中心に弘法大師像が描かれ続けた点に着目し，これらの絵図が，実用面よりもむしろ宗教的意味性を象徴するものとして捉えられる視点を提示した〔田中 1989〕。つまり，このような絵図の流布は，遍路行に必要でかつ実用的な情報の流布であると同時に，四国遍路世界の象徴性の流布でもあったのである。そして「四国順拝御土産絵図」〔岩村 1973 第 14 図〕と題するものがあるように，時にはこれらの絵図が土産物として利用され，四国遍路の宗教性とその意味は遍路者の出身各地へ持ち帰られる形で伝播していった。

以上，本節では四国遍路の関連メディアの流通に着目し，その隆盛について述べてきた。これらのことが示すのは，近世期に四国遍路に関する諸情報を発信・伝達・受容する言説空間が確立していたということである。そして，それによってこれらの諸情報は（限定つきながら）広く人々に共有されていたのである。

### 3. 文芸作品にみる四国遍路の表象

ところで，四国遍路について言及しているのは案内書や絵図といったいわば専門メディアに留まらない。当時の一般社会において四国遍路がどの

<sup>10</sup> 愛媛県立歴史文化博物館の企画展示「四国遍路の出版物」（2000 年 11 月～2001 年 2 月）による。なお，この閲覧に関して同館学芸員大本敬久氏より様々な御教示を頂いた。

<sup>11</sup> ただし絵画表現は A 様式に比べ多少充実している〔田中 1989 249～251〕。

ようなものとして受け取られていたかを示すものとして、次に近世の文芸作品に注目してみたい。

扱（さて）おことわりを申します。四国へんろの義はきどくおほきこととござります。私存じましたもの此夏より四国をめぐり初秋のじぶんに下向仕ましたが、四国へんろのじゅんれいが、げんに利生をうけきどくのござりましたをみて参り…〔狂言『けいせいゐんぐわ物語 四国遍路』<sup>12)</sup>〕

四国へんろと思ひ立大炊がつまは、我子のほだい、かつふじがつまは父のため、それよりもなを一すじにおつとの此世のねがひ、めぐる利生は、をのづから身のとく島に、舟よせて、おがみはじむるれうせんじ…ことには二人の女四国遍路八十八ヶ所を順礼し、我親のため我子のためとかつごう（渴仰）功養のくどく（功德）力…皆一すぢのゑかうと成て弥勒をまたず只今即身成仏すと。〔近松門左衛門『嵯峨天皇甘露雨』<sup>13)</sup>〕

其外四国に御建立の霊場数ヶ所、また御作仏所々に霊応著明、自らこれを巡行し給ふを、今に伝えて先祖亡霊の跡を弔ひ、我現世未来の洪福を祈るの結構なり、故に一たび遍礼の輩、悉く大師の利益を蒙ること疑なし。〔十返舎一九『方言修行 金草鞋第14編 四国遍路』<sup>14)</sup>〕

<sup>12)</sup> 野間光辰（監修）1973 『翻刻絵入狂言本集 上』般庵野間光辰先生華甲記念会。引用部は85ページ。

<sup>13)</sup> 近松全集刊行会（編）1988 『近松全集』第9巻、岩波書店。引用部は72ページ及び102ページ。

<sup>14)</sup> 『十返舎一九全集』第3巻、高野義夫（翻刻）、図書刊行センター、1979。引用部は501ページ。

狂言は、「功德記」出版直後の1691（元禄4）年に京都で上演されたもので、内容は仇討ちものであるが、冒頭部で四国遍路が功德の多い巡礼であるということを観客に語り、そこから話が始められる。この狂言は評判をとり、元禄8年の『役者大鑑』市河直右衛門及び山下又四郎の条、元禄13年『役者談合衝』の杉山勘左衛門の条に「近年みた事もない大できなり」「様々のあてこと。今に思ひ出す」などと評価され、後々まで繰り返し人々の話題になったという〔野間1973 解題8～9〕。このような四国遍路の功德をモチーフとする文芸作品は、その後、近松門左衛門『嵯峨天皇甘露雨』（1714頃）、十返舎一九『方言修行 金草鞋』（1822）といった人気作家のベストセラー作品にも引き継がれていく。特に近松は親と子の菩提を弔い、その功德によって弥勒下生の時を待たずに即身成仏を遂げるという、教義の側面も取り込んでおり、民衆の間に四国遍路の意味世界を説得力ある言説によって提示した。また一九になると、四国遍路の利益を保証する根拠が弘法大師と直接的に結びつけられており、四国遍路の独自性をより強調する形となっている。つまり、これらの人気文芸作品は「四国遍路が御利益のあるもの」として人々に広く受容されていたことを示すものと言えよう。

このことは、まず四国遍路に関する言説空間の成立があり、そこでの情報の蓄積と洗練を経て、それらの知識が一般社会にも利用されるようになったことを表すものである。そしてまた、それらの言説が再帰性を獲得し、これにより連続して人々を四国遍路へと動機付けるようなサイクルの成立を示す。つまり、近世期の四国遍路の民衆化は、ハード面では札所重視で、行程を短縮・簡略化し、インフラも整った「八十八カ所巡拝」の成立、そしてソフト面では巡礼に関する情報の蓄積と巡礼体系への参加を促す物語群の定着といった「四国遍路に関する言説空間」の登場、この二面展開で行われたのである。

### 3. 尻なし貝物語

#### 1. 「阿州小野の尻なし貝」

民衆を巡礼へいざなう動機付けを第一義として成立したのが「功德記」だったわけであるが、中でも着目されるのは第9話、「阿州小野といふ所のさかせ川に蜷貝あり…」という話である。

阿州小野といふ所の、さかせ川に蜷貝あり。此貝、椎の実のごとくにして、とがりありて、わたる人の足にたちてなやみけり。一人の遍礼僧とて、加持しけれハ、貝のとがりたる所まるく、なつめのやうになりて、それよりわたる人、なやむ事なし。川の上下ハさなく、わたる瀬の貝ばかり、かくあるこそふしぎなれ。彼遍礼僧といふは、大師にて、遍礼人をなやまさじとの、御めぐみにてといひ伝ふ〔功德記 221〕。

巻貝の先が、川を渡るたびに足に刺さって困っていたのを、弘法大師が遍路への慈悲の心から奇蹟を起こし、その苦痛の源である貝の先を丸めてしまった。この話型は宮田登のダイシ伝説の類型によれば、奇蹟強調型の一種になるだろうか〔宮田 1971 107～111〕。また真野俊和による「功德記」のモチーフ類型では「C. 大師のいわば文化英雄型としての側面を説いたもの」で、特に巡礼者に対する態度とは切り離されて「大師の験力の強大さのみを強調するモチーフだけが独立したもの」となっている〔真野 1991 139〕。功德譚ではあるが、具体的直接的に遍路行の功德を説くというものではなく、広く、四国遍路を見守る大師の慈悲を示す物語群のひとつであるといえよう。

この伝説の類話は多くない。後述するように、『日本伝説大系』などによると同様の話は秋田県、山梨県、島根県などに散見されるが、“弘法清



図1 「功德記」第9話「阿州小野の尻なし貝」〔近藤 1973 469～470〕

水”，“杖杉”，“跡隠しの雪”のように有名なものとは異なり，分析や整理は進んでいない．また，先の宮田，真野らの類型でも，その典型例とはいえず，そういった意味であまり注目されてなかった話でもある．

しかし，この伝説は，その後全く語られなかったものもある「功德記」の物語の中でも，本稿末「資料」にあげたように，近世期を通じて繰り返し語り継がれた伝説である．さらには「阿州小野といふ所のさかせ川」と特定の場所に関するものであり，であるならば，その土地の状況や文脈に即して再考することで，何か新しい発見があるかもしれない．そこで本稿では，ひとつの功德譚として切り取られたこの伝説を，一旦地域の文脈に差し戻す．その上で伝承のされ方や成立環境などを調査し，まずこの伝説の背景を明らかにする．次にその変容の分析，類似のものとの比較などの作業を通じて，この巡礼功德譚から四国遍路本体の変容などを読みとっていきたい．

## 2. 尻なし貝の正体：イシマキガイ

このような問題意識から、筆者は 1999 年春にフィールドワークを実施した。調査は、文献の情報を参考に調査地を設定し、聞き取りで得られた情報を元に、実際に川に入って貝を採取し、それらを有識者に確認して貰うという方法で、まず、この巻き貝（以下、現地での主たる呼称に従い“尻なし貝”と呼ぶ）を特定した。さらにそれを生物学図鑑などで、生物学的な種を同定した。以下はその概要である<sup>15</sup>。

### 伝説の現場（福井町鉦打）

「功德記」では「阿州小野のさかせ川」となっている尻なし貝の生息地であるが、さらに絞り込むために近世後期の旅行家、松浦武四郎の『四国遍路道中雑誌』見てみよう。

少し行て茶屋壱軒有。是より鉦うち坂。越て少し行、さかせ川。歩行渡り也。この川に蜷多し。此貝昔は尖多くして歩行の足のひ〔う〕らをいためしかば、大師加持し給ひしニより、今の渡り場上下二丁斗の間ニ住る蜷には尖なり〔し〕。其の上下は皆尖有りて歩行渡りがたしと云伝ふ。越て少し行て小野村…〔松浦 1844 217〕

これによると、さかせ川の場所は、正確には小野よりもむしろ 22 番と 23 番の間の遍路道沿いにある「鉦打（現・徳島県阿南市福井町鉦打）」と推定される。近辺には番外札所・弥谷観音がある<sup>16</sup>ほか、戦前には遍路宿

<sup>15</sup> 紙幅の都合もあり、本稿ではごく概説だけを記す。フィールドワークの具体的な内容等は一般向けの読み物の体裁を取っているが、〔浅川 2001b〕、あるいは筆者ホームページを参照されたい。

<sup>16</sup> ただし、弥谷観音は近世期の案内書には登場しない比較的新しい番外札所である。また現在それはダム建設時に移転されたものである。



もあったという。南四国でも有数の多雨地域であり、1952（昭和27）年には167 mm/hの集中豪雨で死者6名、被害家屋360戸、浸水農地111 haという甚大な被害を出した<sup>17</sup>。そのようなこともあって防災・灌漑用のダムが計画・着工され（1995年完成）、集落の一部が水底に沈むなど、近年自然・人工ともに環境面で大きく変化した所でもある。

### 伝説の現在

まず、この伝説の地元における伝承であるが、比較的よく保存されており、福井町内で話を聞いた老若男女10数名のうち、これを知らなかったのは小学生くらいの男の子と、40代の女性二人だけであった。この貝と弘法大師の関連性についても良く言及され、「功德記」のいう大師の加持の内容を、「杖で突いた」と具体的に語る人も多かった。また別の名称として“ごうな”という呼称や、外見的特徴として「貝のお尻が欠けている」という説明から、“ひらべったい”あるいは“台形に近い”とより詳しいものもあった。また生息場所についても、ほとんどの人が「さかせ（逆瀬）川」及び「弥谷観音に渡る橋の下」と特定の場所を示した。

この逆瀬川とは、福井町を貫流する福井川の一部を指す。福井川は鉦打ではS字状に蛇行しており、その真ん中部分が、ちょうど逆流しているように見えることから「逆瀬」というらしい。旧道には逆瀬橋という橋が残り、またダム工事に伴ってより高所に掛け替えられた国道55号の新逆瀬橋にその名を留めている。逆瀬川そのものは、現在ではダムの直ぐ上流になりその影響もあってか、付近の古老によると、かつては「べったり（たくさん）おった」というものの、今回の採集調査ではこれを発見することはできなかった。また、後者の弥谷観音に渡る橋の下は既にダムの底で、現在では確認が不可能である。

今回、生息を確認したのはこれらよりやや下流の場所になる。旧遍路道

<sup>17</sup> ダム併設の福井ダム資料館に掲載の資料による。

にあたるダム直下の橋の下で、その上手には庵跡があり他国者の墓が数基散見される。付近の農家の女性によると、昔はここにもいたということであつたので、川辺までおりたところ、至る所に尻なし貝が発見できた。これ採取し、古老に確認したところ、確かに尻なし貝だということであつた。また、ダム工事に際して絶滅を危惧した地元有志が尻なし貝を捕獲し、籠に入れて山水の溜につけていたのを引き上げたところ、中には既に貝殻だけになった10数個の尻なし貝が保存されていた。捕獲した尻なし貝はこれらと酷似しており、その点からも、今回捕獲した貝が尻なし貝であることが確認できたのである。

#### 「尻なし貝」の正体＝イシマキガイ（の大型のもの）

尻なし貝の生物学的な分類はイシマキガイ (*Clithon retropictus* 原始腹足目アマオブネ科) という。図鑑によると、本州以南の主に汽水域に生息するとのことである〔吉良 1959 24〕。またインターネットには、小学生の野外実習で捕獲したという話もあるし、筆者もペットショップで水槽に入ったイシマキガイが売られているのを見かけたことがある。つまり、生物学的にはイシマキガイは特に珍種というわけではない。

ただ、この貝は同じ種であってもその大きさにずいぶんとばらつきがある。同じ川でも河口付近では1～1.5 cm 級の小さいのしか見つからず、これは尻なし貝ではないという人もいた。逆に鉦打では3 cm 程の大きさがあり、特徴的な先端の欠損も大きく、素人目にはとても同じものだとは思えない。また貝殻だけになっていた地元有志が保存した尻なし貝も、同じく3 cm 級のイシマキガイであつた。したがって、地元で尻なし貝と呼んでいたのは、正確には大型のイシマキガイということになる<sup>18</sup>。

<sup>18</sup> 専門家によると、この貝は川を上り下りし、成長したものが上のほうに居ることであるが、なぜこの貝が生息地によって大きさにばらつきがあるのかということは依然調査中であり、はっきりしたとはわかっていない。

## 「尻なし貝」の象徴論的解釈

この貝を象徴論的に解釈すると次のようになるだろう。タニシやカワニナなど似たような巻き貝もたくさんいるなかで、なぜか遍路道の渡河ポイントにちょうど（金剛）杖の先ほどに先端が欠けている貝が生息している。この不思議な自然の摂理の原因を、「おだいっさん（弘法大師）が杖についてお尻がまるうなった」と地元で語られているように、遍路空間を流れる民俗宗教的コンテクスト即して説明した姿、それが「尻なし貝」である。つまり、尻なし貝は、生物学的な種としてのイシマキガイに、四国遍路の宗教的文化的な記号性が乗っかって解釈されたものなのである<sup>19</sup>。

## 4. 巡礼功德譚のダイナミズム

### 1. 弘法大師遍路信仰と巡礼功德譚の拡散性

#### その他の尻なし貝伝説

「尻なし貝」伝説には、先述の通りいくつかの類話が紹介されている。これらのうち、秋田県平鹿郡里見村高畑、同由利郡鳥海町百宅のものは弘法大師伝説であり、モチーフも鉦打のものに近い〔寺田 1976 (1934) 490 及び日本伝説大系 2 巻 68〕。しかし、山梨県身延町は日蓮上人、島根県温泉津町は素戔鳴尊<sup>すさのおのみこと</sup>と主人公が大師ではなく、素戔鳴尊の場合は衣にまとわりつく蛭や螺を怒ってうち捨てた結果、蛭は口なしに、蝸は尻切れになったとし〔同 11 巻 246～247〕、日蓮上人の場合は献上された汁に入っていた螺を大慈大悲の秘法で復活させ、生き返ったものが本国寺境内の池にいる尻なし螺だとする<sup>20</sup>など、その動機や行為も微妙に異なっている。また、貝が足に刺さる苦痛を法力で和らげたとするモチーフを共有す

<sup>19</sup> なお分類に関しては、『日本伝説大系』のいう自然説明型にあたると思われるが、福田晃が指摘するように弘法大師の文化叙事伝説と分類することも可能である〔福田晃 2000 33, 35〕。福田は「伝説はそのような複合的意義を有して伝承される」と述べるが〔同 35〕、ならばこれらの分類項目は要素名としては有効だが、“分類”自体は意味をなさないのではないだろうか。

るものとして、神奈川県横須賀市の「角なしのサザエ」がある〔同5巻242～243〕。更に、錦仁によると小野小町に関連した“尻切れ田螺”の伝説が福島県白河市小田川にあり〔錦2001 4〕、長野県佐久市のホームページでは、同市内の安養寺に開祖法燈国師に基づいた“尻なしタニシ”の伝説が写真つきで紹介されている<sup>21</sup>。これらの他、四国はこれまで次の二つの類話がある。

尻なし貝—伊与木川をお大師さまが歩いて渡ったときのこと、お尻がとがった川蛭貝がお大師さまの足をさした。そこでお大師さまは、貝のとがったところを除かれたので、それからは、人の足をささなくなった。〔高知県窪川町〕<sup>22</sup>

…小さな子供が泣きながらシジミを採っています…貝の尻先がとがっていて、足裏に突き刺さって痛いのです」と答えました。そこで大師が念仏を唱えと、ゴウナの尻がすり減って丸くなり、いくら踏みつけても痛くありません。親孝行な子供のために、大師がゴウナの尻を取ってくれたのです…〔高知県東洋町〕<sup>23</sup>

窪川の話は、37番岩本寺の七不思議の一つとして語られているものである。また東洋町のものは、管見の範囲では遍路関係の書物に取り上げられたことはない。いずれも型は鉦打のものと酷似している。

<sup>20</sup> 悪性の熱病を“たにし”に封じ込めたとするヴァージョンもある〔同11巻243〕。また、殺生と慈悲をテーマとするこの身延の伝説は、蛭貝を放つ宇佐八幡宮の放生会を想起させる興味深い事例である。

<sup>21</sup> 佐久商工会議所ホームページ <http://www.sakucci.or.jp/hakken/hakken01.html>

<sup>22</sup> 窪川町ホームページ <http://kubokawa.com/mukashi4.html>

<sup>23</sup> 郷土史家・原田英祐氏の御教示による。

### 弘法大師遍路信仰（土地の主人公と普遍的主人公）

素戔鳴尊や日蓮上人にみられるように、同型の伝説がその土地に縁の深い人を主人公として選択されることは多々ある。一方で、弘法大師は普遍的な性格をもって登場する主人公であり、この理由として神の太子に繋がる「タイシ信仰」を持ち出す柳田の説〔柳田 1998 (1929) 359 など〕、あるいは「超宗派的な大師の入定・ミロク下生による不滅・復活の信仰」とする宮田登の説などがある〔宮田 1971 134〕。秋田の話などはこのタイプといえよう。しかしながら、四国遍路空間では、柳田、宮田が述べるような弘法大師信仰の論理をベースにしつつ、さらにその上に、四国遍路ならではの特殊な論理が追加されている。

…大師の御記文とて伝ふるに、身を高野の樹下にとどめ、  
魂を都率の雲上にあそばしめ、所々の遺跡を検知して、日々  
影向をかがずとあり。此文世の人信じあへる事にて、人々の  
耳にとどまる事となんぬ。御遺跡へは大師日々御影向あるに  
より、八十八ヶ所の内いづれにてぞは大師に直にあひ奉ると  
いひなせる…四國遍礼すれば、大師にかならずあい奉ると聞  
しにより、われ遍礼せし時、日々心をかけて、けふそゝと待  
しに、廿一日にてありしに、あんのこつく大師にあひ奉りし  
こそ、有がたけれ〔功德記 213〕

「功德記」の冒頭に登場するこの話は、巡礼者が大師の影向を信じて歩き、縁日の二十一日に巡り会ったという、いわゆる入定信仰の派生形であるが、その影向する先を具体的に八十八個所に限定することで、「弘法大師は今なお生きて四国を遍路している」というぐあいに四国遍路的に特化した形になっている。これを本稿では入定信仰と明確に区別するために「弘法大師遍路信仰」と呼ぶ。そして、この思想が当時、四国遍路世界に

根付いていたことは「功德記」以外に、津村庵淙の「譚海」(1795)<sup>24</sup>、喜多村信節(1783～1856)の「筠庭雜録」(成立年未詳)<sup>25</sup>といった当時の随筆からも伺い知ることができるのである〔宮田 1971 121〕。

### 巡礼功德譚の拡散性

ここで、序論で述べた巡礼功德譚の「拡散性」を思い出して頂きたい。遍路空間では功德譚の主役である大師も巡る、また伝達者である遍路者も巡る、そしてこのような情報も巡っている。四国遍路の始祖と伝えられる衛門三郎の物語が、松山市の51番石手寺と文殊院、そして徳島県神山町の杖杉庵を結ぶストーリーになっているなども、このような情報の移動を裏付けるものといえよう。

浮遊する巡礼功德譚が、機会を得て、別の場所に定着する可能性もある。例えば尻なし貝の場合、比較的浅い川と遍路道が交わるような場所であり、特徴のある貝がいれば、そこに外からやって来た物語がなじんでしまう可能性もある。主人公の弘法大師が、今なお遍路空間のいずれにおいても出没するのであるから、あとは伝説を定着させるような要素、景観や記念物、特徴のあるモノがあればよいのだ。それで新しい話が違和感なく成立してしまう。つまり、この拡散性は、弘法大師遍路信仰に基づく、弘法大師の遍在性を現すものであり、なおかつそれが常に現在進行形であることを物語るのである。

<sup>24</sup> 原田伴彦他(編)1969『日本庶民生活史料集成』8, 三一書房。該当部は108ページ。

<sup>25</sup> 喜多村信節 1994『日本随筆大成』第2期7 吉川弘文館。成立年は未詳であるが、『日本古典大辞典』の朝倉治彦の説明によれば、1832年以降とされる。該当部は87ページ。

## 2. 功德譚の生成：窪川町岩本寺七不思議の場合

### 二つの尻なし貝：イシマキガイとカワニナ

ところで高知県窪川町と東洋町の尻なし貝伝説だが、興味深いのは、これらの尻なし貝はイシマキガイではなくカワニナであるということである。

高知県窪川町の岩本寺で渡された資料には「尻なし貝は、河川の黒蜷で（蛸）の餌になる貝ですが伊与木川の貝はお尻が擦り切れている<sup>26</sup>」とあり、これは明らかにカワニナのことを指している。また窪川町ホームページの「窪川民話の里めぐり」にある挿絵もカワニナであり、更に、町史編集委員の林氏もカワニナのことを尻なし貝と述べ、イシマキガイの写真を見せると「これは見たことがない」と言われた。東洋町のほうは“実物”を原田氏が示されたが、それはカワニナであった。

カワニナとイシマキガイの相違は写真を見比べると一目瞭然である（図2参照）。その欠損はイシマキガイのほうが断然大きく、特に大型のイシマキガイは、カワニナ、タニシ、小型のイシマキガイなど他の淡水産巻貝とは一目にして区別できる。現に鉦打ではカワニナを見せると、これは尻なし貝ではないと明確に否定された。「功德記」でもカワニナを“椎の実”，尻なし貝＝イシマキガイを“なつめ”と表現し、さらに挿絵も両者を明確に書き分けている。

更に窪川町では尻なし貝の知名度が著しく低い。筆者も20数名に尋ねてみたが、多くの人が伝説自体を知らない上、実物を見たことがあるのは窪川町内ではほぼ皆無であった。鉦打の場合と比べ、その知名度には格段の差があるといえよう<sup>27</sup>。

もっともこの話は窪川町（高岡郡）の伝説とされているが、その舞台と

<sup>26</sup> 引用中の括弧は原文にあるもの。

<sup>27</sup> ただし、文字化の度合いでは、ほとんどなされていない鉦打に対し、窪川は少なからず資料化されている。

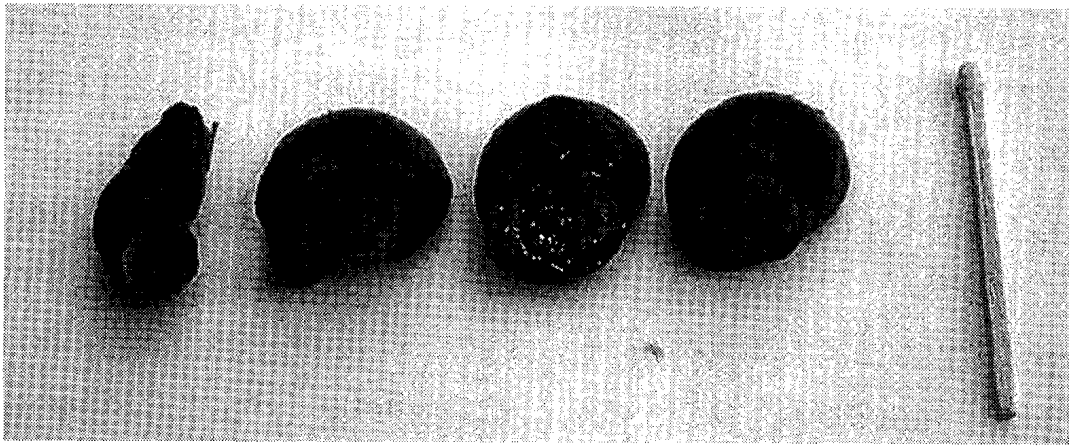


図2 カワニナ（左端）とイシマキガイ（筆者採取のもの）。カワニナは奥、イシマキガイは手前が先端になる。

なっている伊与木川は山一つ越えた隣町の佐賀町（幡多郡）を流れる川である。そして“現地”佐賀町の伊与木川沿いでは、5名中1人であるが、弘法大師伝説と絡めた尻の欠けた貝の存在を知る婦人に会うことができた。「尻なし貝」ではなく、「ゴニナ」と呼んだそうであるが、写真を見せたところ、彼女はイシマキガイのほうをそれと明言し、伊与木川に生息しており、かつてはこれを食したこともあると証言した（ただし台風による増水の影響もあってか、今回の調査ではカワニナは採取したが、イシマキガイを見つけることは出来なかった）。

つまり、鉦打の尻なし貝伝説が、弘法大師の巡る空間、川、特徴的なイシマキガイの三要素の上に成立しているとするならば、現場の伊与木川の場合、鉦打の話と構成要素は同じであるが、伝説の所属地である窪川では、イシマキガイはカワニナにすり替わっているのである。

### 「岩本寺の七不思議」

東洋町の伝説はいつの時代のものか不明であるが、窪川町の話は明らかに新しい伝説である。近世には本稿末の「資料」にあげた範囲では登場しておらず、初見は昭和9年の安達忠一『同行二人四國遍路たより』であ



り、これはまた戦前までの唯一の記録である。更に語られかたも、尻なし貝単独で語られるのではなく、「岩本寺の七不思議」のひとつとして紹介されている。

岩本寺の七不思議とは尻なし貝のほか、三度栗、筆草、桜貝、口無し蛭、子安桜、戸立てずの庄屋をいう。このうち三度栗は岩本寺境内、子安桜は仁井田五社境内にあるが、他の5つについては、窪川町高野（口なしの蛭）、窪川町興津（筆草と桜貝）、佐賀町伊与喜（戸立てずの庄屋）が現場であり、岩本寺から概算の直線距離でそれぞれ、4 km, 8 km, 12 km ほど離れた場所にある。尻なし貝の伊与木川の場合、上流と下流で異なるが、最も近い佐賀町市野瀬地区でも5 km ほど、今回出会った識者が示す場所は、さらに2, 3 km 下流のポイントである。

これらの話には近世期に類話が存在する。戸たてずの庄屋は、「まさき村、この村の庄屋代々とざさぬなり。ありがたきいわれ有り、たづねらるべし〔道指南 95〕」「雨戸無シの庄屋 大庄屋也。篠山権現の御利生ニ依り盜賊此家へ得不入、雨戸なしの障子〔『四国遍路図会』<sup>28</sup> 257〕」と紹介され、これは番外札所篠山神社ふもとの愛媛県一本松町正木の伝説となっている<sup>29</sup>。これは絵図にも名所として記載されるほど、有名な話であった<sup>30</sup>。また、三度栗は「功德記」によると豫州宇和郡三間村の物語とされている<sup>31</sup>が、三度栗の本場は現土佐清水市市野瀬の真念庵とする書物もある〔安達 1934 82〕。この三度栗は他にも、愛媛県北宇和郡津島町神田、

<sup>28</sup> 1800（寛政12）年頃。久保武雄氏による復刻本と〔伊予史談会 1997〕収録の翻刻文を参照した。以下「図会」と略記。なお、典拠は伊予史談会版のページ番号を記した。

<sup>29</sup> なお、この旧家は現在まで存続しており、その蔵岡家には遍路の納札を詰めた俵が保存されていたことが喜代吉榮徳によって報告されている〔喜代吉 1995 1～14〕高知県幡多郡佐賀町、高岡郡窪川町、土佐市芝、安芸郡東洋町生見、徳島

<sup>30</sup> 例えば〔岩村 1973 第1, 3, 9, 10 図〕など。

<sup>31</sup> ただし、「道指南」「図会」では“七度栗”と記述されている。

高知県幡多郡佐賀町、高岡郡窪川町、土佐市芝、安芸郡東洋町生見、徳島県三好郡池田町と、四国全域に類話があり、いずれも遍路又は大師に関する話となっている〔日本伝説大系 12 巻（四国編）264～266〕。いずれにせよ、近世期には窪川の七不思議という話はなく、むしろ尻なし貝、戸立てずの庄屋、三度栗は他所の話となっているのである。

### 37 番札所の歴史的経緯

ところで、先に述べたように近世期の 37 番札所は現在の岩本寺ではなく、仁井田五社という岩本寺から直線距離で 1.7 km ほど隔てた神社であった。岩本寺はその別当寺で、納経所であったが、37 番札所は仁井田五社であり、岩本寺は沿線の一要素という扱いにすぎない。

岩本寺は、明治期の廃仏毀釈で 1871（明治 4）年に一時廃寺になり、その後 1889（明治 22）年に再興されるも無住職状態で、1913（大正 2）年に第 28 世住職（現住職の先々代にあたる）が入山するまで、31 番竹林寺の僧が春の巡拝者が多い季節にのみ住職として岩本寺に留まるという時期が続いていた〔佐々木 1980 106 及び「岩本寺略歴」<sup>32)</sup>〕。つまり、岩本寺は遍路とのゆかりは浅からぬものがあるものの、札所として安定的に運営され機能するようになるのは比較的新しい寺院である。

では、いつ頃から 37 番札所として認知されてくるのだろうか。1897（明治 30）年の澤田友五郎『四国徧路八十八カ所道志るべ』までのガイドブックには 37 番は仁井田五社と記載されている。また、1918（大正 7）年に遍路した高群逸枝によると、彼女自身は「三十七番は高知県の窪川にある藤井山岩本寺……いかにも此れが大師の旧蹟には違ひない」としながらも、八幡浜に上陸後直ちに参拝した大黒山吉蔵寺が四国 37 番札所を名乗っている事情を紹介し、「でも古来の本尊や御納経の版は吉蔵寺に伝はつてゐる」そしてその由来を当地の素封家大黒屋吉蔵が 30 数年前に靈験

<sup>32)</sup> 岩本寺で渡された配布資料。

により、見る影もなく衰微している岩本寺から 3500 円で本尊と納経の版を買い取り、新たに寺を建立したと紹介している〔高群 1979 (1918) 84〕。もっとも彼女が後に再執筆したものでは、37 番は窪川の岩本寺となっており、大黒山吉蔵寺に関しては「然し、普通には此寺は八十八カ所の中には入つてゐない」と記し、37 番が並立していることに同行の一徹減され否定的なニュアンスとなっている〔高群 1938 31～32〕。これらから推測すると、大正 2 年に住職が入山後もしばらくは混乱期が続き、札所寺院としての地位が盤石になるには今少しの時間を要し、大体大正後期から昭和にかけてと考えられる。

### 伝説の生成

札所寺院というまでもなく四国遍路の主たる参拝の場である。特に“四国八十八カ所”という観念<sup>33</sup>の成立後は、四国遍路空間でもっとも聖性の濃密な場所として、その他の構成要素、例えば遍路道や番外札所などとはその聖性の期待の度合いが格段に異なってくる。

しかし、岩本寺の場合、新しく札所寺院となったため、本尊などは五社から引き継いだが、遍路者達によって生産され、伝承されていた霊験譚や功德譚といった情報要素が札所寺院の聖性に相応しい程多くはなかった。そこで、近辺の弘法大師にまつわる功德譚、あるいは遍路とともに巡ってくる物語を収集し、岩本寺の七不思議という形で調べていったのではないか<sup>34</sup>。そして、このときの伝説の現場と所属地との乖離によって、尻なし貝がイシマキガイから手近にいるカワニナに変わってしまったとも考えられる。窪川の尻なし貝物語（さらには七不思議）の起源などは残念ながら不明だが、少なくとも四国遍路の巡礼功德譚として四国遍路の言説空間に

<sup>33</sup> 筆者は霊場を構成する点、線、面の三要素に着目し、“四国八十八カ所”という観念を「四国遍路は弘法大師の霊場である」という理念から演繹的に導き出される「二元空間モデル」として論じたことがある。より詳しくは〔浅川 2001a 36～40〕を参照されたい。

姿を現してくるのは戦前、多くは戦後である。つまり、窪川の七不思議は、廃仏毀釈によって新しく札所寺院となった岩本寺の聖性を高めるために生成された新しい物語と考えられるのである。

### 3. 巡礼功德譚の消滅

#### 消えた尻なし貝（鉦打尻なし貝のその後）

窪川の尻なし貝が、近代以降新しく登場したのに対し、逆に鉦打の尻なし貝はその後言説空間から消えていく。明治・大正ではぽつぽつと確認されるが、昭和十年代には次のようになる。

次の札所までお婆さん達と買切りの自動車で飛ばす。相乗りだ。「巡禮の人は、いづれも歩きたがるものえすが、皆さん方は、さうではないのですネ」「歩きたい者は歩きなはれ、あほらしい、あんさん、ここに居る者は、五十から七十婆や、なに歩きたい事おまんか」…峠の近くには倒れ杉、尻なし貝、ゆるぎ石、笠地藏などの七不思議があるが、お連れさん方はその方には興味がないので素通りされてしまふ〔宮尾 1943 38〕。

<sup>34</sup> 大正年間に“七不思議”がホットなトピックスになったことがあった。1915（大正4）年に『郷土研究』第3巻7号で丸山瓦全が「足利の七不思議」を紹介した際、柳田国男が「此報告を初にして出来るだけ多く各地の七不思議を集めたし、助勢を求む」と呼びかけたことを受けて、その後約1年間、甲斐、鹿島神宮、土佐蹉跎山金剛寺越後、諏訪神社、会津御山村、松山、豊後姫島、信州鹿塩(3-9)、豊後宇目郷、遠州(3-10)、信州松原湖、信州横吹(3-11)、信州松原湖、東京(3-12)、野州大中寺、上州双村寺、安芸宮島、阿波、豊後(4-2)、薩州阿久根、静岡(4-6)、羽後永楽寺(4-7)など各地から報告が相次いだ（括弧内の数字は巻・号を示す）。しかし、その中に窪川の七不思議はなく、また尻なし貝系の話も含まれていない。近いところでは、38番札所のものがあるが、あるいは岩本寺の七不思議の成立にこれらのことが影響を与えた可能性もある。

尻なし貝のいる阿南市福井町鉦打には22番のある新野から月夜坂を越えて出て、そこから小野一星越峠…23番の日和佐と続いていく。近代化の流れの中で、月夜坂は車が通れるように拡張工事が行われ1926（大正15）年に竣工した。その3年後、1928（昭和3）年には阿南自動車協会によるバス路線が設置される〔沖野 1960 228～229, 235～236〕。さらに1939（昭和14）年には国鉄牟岐線が日和佐まで延長され、新野から日和佐まで汽車で直接行くことが出来るようになった〔『阿波の交通』編纂委員会 1991 188〕。

こうなると、22番と23番とは7里の距離があるため、汽車やバスで直行するのが普通になる。宮尾のように尻なし貝についての知識<sup>35</sup>と興味があっても、乗物で鉦打を通過してしまうために、尻なし貝が彼らの遍路体験の中に入ってこなくなり、ここで功德譚の再帰的サイクルが断絶してしまった。このような交通革命によって、近世にあれほど登場した尻なし貝が、宮尾のこの記述を最後として近代以降は消えていったのである。

### 霊験のリアリティ

車利用、乗物利用の遍路行は1951（昭和26）年の道路運送法改正（昭和26年法律183号）により、その2年後に登場したバスツアーの登場によってますます加速し〔道空間研究会 1994 76〕、歩き遍路は激減した。しかし近年は歩き遍路が増えていると言われている。彼らは、一応当該箇所を歩いて通過するのだが、もはや尻なし貝を振り返ることはない。星野英紀が「現代遍路体験記の代表的なもの」と評する〔星野 2001 324〕小林淳宏のテキストでも、尻なし貝は全く触れられていない。

平等寺に四十分いてここを九時四十五分に出発した。国道

<sup>35</sup> ただし、尻なし貝と弥谷観音の七不思議を混同するなど多少の誤解がみうけられる。

五五号線の登り坂を黙々と歩く。星越トンネル、久望トンネル、一の坂トンネルと三つの峠を越えなければならない。午後一時二十分に雨が降り出し、まる一時間、ざあざあ降り続けた。長い登り坂から下り坂になり、二十三番薬王寺を打ち終えて納経所で朱印を押していただいたのは午後四時だった〔小林 1990 66〕。

これについては功德が成立する構造から読み解けよう。功德・靈驗というものはなによりも有難みのリアリティが必要である。人々にとって本来苦難であることが、奇跡的に解消されるからありがたいのである。有名な靴屋の小人の話が意味を持つのは、靴づくりが手作業だからであり、もし24時間稼働のオートメーションになれば、もはや小人は出番を失ってしまう。尻なし貝の話が最もリアリティを持つのは、人々が川を歩いて渡るときである。だから、貝が足に刺さるという苦難があった。それを奇蹟によって解消したのが大師の功德なのである。しかし、ひとたびここに橋が架かってしまえば、貝が刺さることもなく、有難みの前提となる苦難が成立しない。近世期の四国遍路では橋はほとんどなく、渡し船があればいい方で、特に小さい川になるとほとんどが渡渉である。これに対して現在の遍路行の中では、河川を歩いて渡することは皆無に近い。つまり、近世期には尻なし貝の伝説は大師の功德を説くものとして意味をなしたが、現在では全くリアリティを失っており、その結果、尻なし貝は現代の歩き遍路の体験にはもはや入り込む場所を失ってしまったのである。

### 札所寺院の求心力

現代の歩き遍路の小林がこの区間を札所から札所へ「黙々と歩く」と述べるが如く、尻なし貝が遍路者の体験から失われてしまった要因としてもうひとつ、巡礼者の意識が札所に偏重していく結果、遍路道沿線の細々と

した途中の過程に注意を払わなくなっていくということもある。これは遍路体験における線（遍路道）から点（札所寺院）への重点の移行と言って良い。

最初に述べたように、民衆型四国遍路で重要なのは八十八個の札所寺院である。極端な話、どのような手段を用いても88の札所を全て巡拝し終えないと、論理的に四国遍路という巡礼は完成しない。そのような中、様々な移動メディアが選択可能になるとどうなるか。

二十二番から薬王寺まで二九キロ、遍路さんもほとんどの人は汽車利用でゆくという。私も平等寺から二・二キロぐらい歩いて、国鉄新野駅から乗車して日和佐にいった〔西端 1964 127～128〕

先に宮尾の同行が述べたように、そしてここで西端が記すように、特に札所間の距離があるところなどで乗物利用が進んでいく<sup>36</sup>。遍路道の重要性は著しく低下し、逆に、札所寺院の担う役割は相対的に重要性を増してくる。結果、四国遍路における、非日常性、宗教性、聖性などは札所寺院が一手に担う状況になり、同じ巡礼功德譚でも札所付随のものが重視されたのではないだろうか。小林ら現代の歩き遍路の受容する情報は、沿線から札所へという再構成のプロセスを経た後のものであり、自然、沿線の情報が不可視化され、これらが彼らの体験の中に入ってこないとも考えられる。

つまり、これは巡り方の変容にともなう遍路空間の意味的再構成の結果として理解できる。22番平等寺と鉦打の距離は4 km 超であり、岩本寺と伊与木川が少なくとも5 kmであったので、両者の位置関係はそう変わ

<sup>36</sup> 近代の四国遍路における乗物利用に関しては星野英紀の論考を参照されたい〔星野 2001 187～207〕。

らない。しかし、その盛衰はある時期—戦前と戦後—を境として、くっきりと明暗を分けている。鉦打近辺の札所寺院とそれに類するものとしては、22番平等寺、番外月夜お水庵、番外弥谷観音がある。しかし平等寺には山号にもなっている白水の井戸の伝説や、境内に奉納されている“いざり車”に関する功德譚、月夜お水庵には、逆杉、御加持水、闇夜が月夜になる話、弥谷観音には七不思議（不二地藏、笠地藏、四寸通し、硯石、日天月天、揺るぎ石、胎内くぐり）と称する物語群といずれも自前の霊験譚・功德譚を持つ。その為、鉦打の場合は窪川のように近辺の札所寺院等に吸収される必要もなく、沿線の伝説であり続けた。

鉦打が単なる沿線の物語であったがために、次第に忘れられていったのに対し、伊与木川のほうは現地を離れ、37番札所の物語として語られたために存続していった。線上にあるものは消え、点に引き寄せられたものが残るのである。この両者の運命の違いにこそ、四国遍路の意味性が、札所中心にシフトしてきた証拠であろう<sup>37</sup>。藤山正二郎は「物語が生成された状況から遠くなると、物語がおかれたコンテキストは忘れ去られ、物語は浮遊し、新たな意味が付与されやすい」というメカニズムを指摘している〔藤山1991 181〕。これによるならば、尻なし貝伝説も、「渡渉」の苦痛というコンテキストを失い、四国遍路空間を浮遊しているうちに、新しい札所寺院の聖性強化という新たな需要の下に定着したという言い方もできるだろう。鉦打の尻なし貝伝説の消滅と窪川の尻なし貝伝説の生成というダイナミズムの背景には、このような四国遍路における構造変化が読みとれるのである。

<sup>37</sup> なお、同様の傾向を示すものに、功德記第1話と10番切幡寺の話がある。いわゆる“弘法機”の伝説であるが、「功德記」に「土州高岡郡仁井田の庄窪川村」の話として紹介されているものは消えていくのに対し、「霊場記」などには記載のない切幡寺縁起のほうは現在まで語り継がれている。



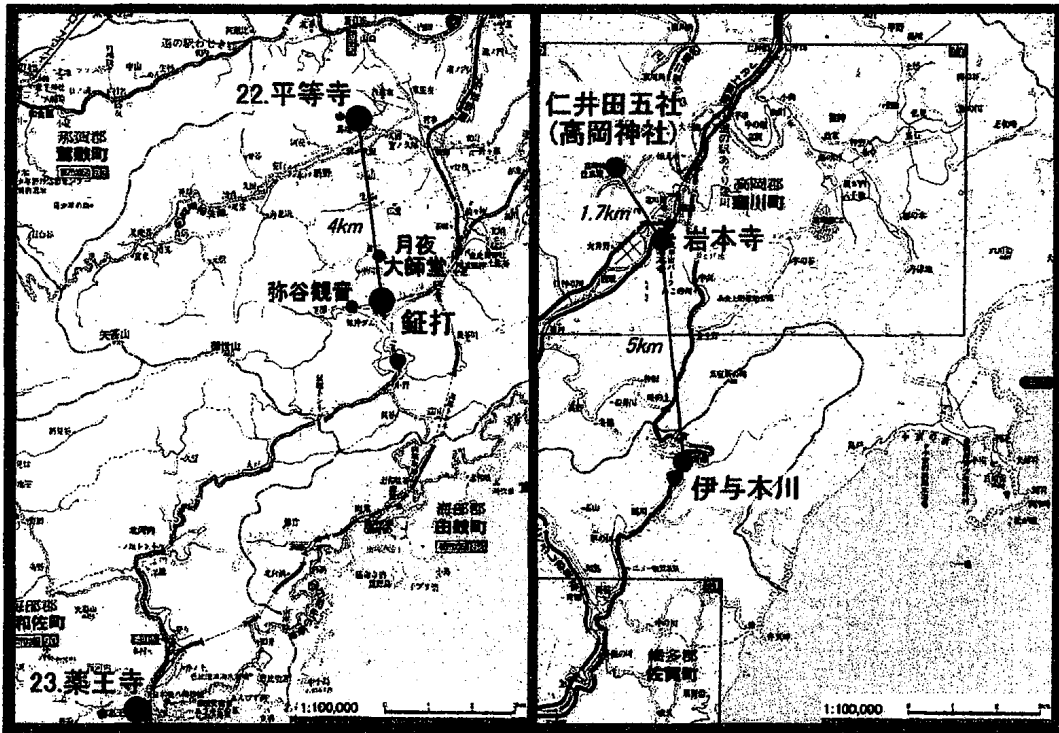


図3 左…鉦打（徳島県阿南市福井町）、右…窪川（高知県高岡郡窪川町）共に昭文社ニューエース『徳島県都市地図』（1999）、『高知県都市地図』（1999）をベースに筆者作成

## 5. おわりに

### “巡礼功德譚”の可能性

以上の分析から、最後に四国遍路における尻なし貝伝説を事例とした、巡礼功德譚のダイナミズムを検証しておきたい。

まず、近世期の四国遍路において、当時の人々の間に、四国遍路に関する情報を発信、伝達、受容していく言説空間が成立していたということを示して、このような巡礼功德譚研究の有意性を示した。その上で、尻なし貝の伝説が繰り返し語られていたということを紹介し、この伝説を再帰的に語り継ぐサイクルを確認した。さらに、このサイクルの発生と消滅は鉦打と窪川の二つの事例に見ることが出来る。そして、それに関連して、交通革命による巡り方とそれに伴う巡礼者の意識変化という四国遍路世界の変

容を指摘した。

また、鉦打の伝説の消滅と窪川のそのの発生は、ほぼ同時期に時を同じくして起こっており、あたかも鉦打から窪川へ水平移動したように見える。巡礼功德譚のダイナミズムの観点からは、このシフトが巡礼功德譚の拡散性によって準備されたものであることを指摘できよう。加えて、遍路達に伴って四国遍路空間を浮遊している伝説が、その要素を共有するような他所に定着することを可能にする四国遍路独自の思想として弘法大師遍路信仰があることを、本稿では指摘した。

このように、巡礼功德譚はそれが関連する巡礼体系全体と密接にリンクしており、絶えず体系の変容をダイナミックに表象していく。だからこそ、逆にこれらの巡礼功德譚のダイナミズムを分析することで、巡礼体系全体の変容を論じることができる。巡礼功德譚というフレームワークとそれに基づく研究には、そのような可能性が期待できるのである。

## 今後の課題

本稿では巡礼研究の立場から口頭伝承研究の蓄積を利用する試みとして、移動性などのダイナミズムを考慮した巡礼功德譚というフレームワークを設定し、その可能性について、四国遍路の尻なし貝伝説を事例として検討してきた。

今後の課題としては、より直接的に四国遍路の功德を表象し、巡礼行への動機付けとなるような巡礼功德譚をとりあげ、その分析が巡礼全体を理解するのに有効であることを確認したいと思う。また筆者は巡るものと巡られるものとの関わり合いに興味をもっているのだが、巡礼功德譚に関しても、両者の受容の相違や、あるいは共有のされ方などについても検討を加えたいと考えている。

## 註

なお鉦打での調査は1999年4月、窪川町での調査は2001年3月及び2001年10月に行った。

※引用部の“…”は引用者による省略を表し、( )は断り無き場合引用者による補足を表す。また特に戦前の文献は、句読点の調整や、旧仮名遣い、旧字体を改めた個所がある。

## 謝 辞

本稿の概要は2001年10月7日に奈良・帝塚山大学で行われた日本民俗学会第53回年会で研究発表を行ったが、その際多くの有益なコメントを頂いた。また、鉦打、窪川両地区でフィールドワークを行った際にも、多くの方にお世話になった。紙面を借りて厚くお礼を申し上げたい。

## 6. 資料：「尻なし貝」の記述の推移

年代	鉦打	窪川	著者	書名
1638	○	×	賢明	『空性法親王四国霊場御巡行記』
1653	×	×	澄禅	『四国遍路日記』
1687	○	×	真念	『四国遍路道指南』
1690	○	×	真念	『四国徧礼功德記』
1767	○	×	洪卓	『四国徧礼道指南増補大成』
1800頃	○	×		『四国徧礼名所図会』
1819	×	×		『四国順拝日記（仮称）』
1822	×	×	十返舎一九	『金草鞋』
1844	○	×	松浦武四郎	『四国遍路道中雑誌』（遍路行は1836）
1880	×	×	松本善助	『四国徧礼道案内』
1882	○	×	中務茂兵衛	『四国霊場道中記大成』
1884	×	×	中越善平	『四国中并ニ高野道中記』
1897	×	×	澤田友五郎	『四国徧路八十八カ所道志るべ』
1918	×	×	高群逸枝	『娘巡礼記』

1931	×	×	安田寛明	『四国遍路のすすめ』
1931	×	×	和田性海	『聖蹟を慕ふて』
1934	○	○	安達忠一	『同行二人四國遍路たより』
1938	×	×	高群逸枝	『お遍路』
1942	×	×	荒井とみ三	『遍路図会』
1943	○	×	宮尾しげお	『画と文四国遍路』
1943	○	×	宮尾しげお	『画と文四国遍路』
1950	×	△	橋本徹馬	『四国遍路記』（ただし遍路行は1942）
1961	×	×	荒木戒空	『巡拝案内遍路の杖』
1962	×	×	鎌田忠三郎	『遍路日記』
1964	×	○	西端さかえ	『四国八十八札所遍路記』
1969	×	○	平幡良雄	『四国八十八カ所』
1972	×	○	土佐文雄	『同行二人』
1974	×	○	霊場会	『四国八十八カ所霊場記』
1978	×	○	首藤一	『四国遍路八十八カ所』
1986	×	×	村上護	『遍路まんだら』
1987	×	×	宮崎忍勝	『四國八十八カ所遍路（徳島・高知編）』
1990	×	×	小林淳宏	『定年からは同行二人』
1997	×	×	宮崎建樹	『四国遍路ひとり歩き同行二人（第5版）』
1999	×	×	NHK	『四国八十八カ所 1, 2』
2000	×	×	加賀山耕一	『さあ、巡礼だ—転機としての四国八十八カ所—』

※○…記載あり，×…記載なし，△…「七不思議」とだけあるもの

### 参 考 文 献

- 浅川泰宏 2001a「遍路道を外れた遍路—新しい巡礼空間モデルの構築にむけて—」  
『日本民俗学』第226号
- 浅川泰宏 2001b「阿州小野・まぼろしの尻なし貝を追え！」『四国へんろ』2001  
年4月号～12月号
- 荒木博之他(編)1982～1990『日本伝説大系』みずうみ書房

- 『阿波の交通』編纂委員会(編)1991『阿波の交通(下)』徳島市立図書館  
今井金吾(監)1999『方言修行 金草鞋』第4巻, 大空社  
伊予史談会(編)1997『四国遍路記集』(増訂3版), 愛媛県教科図書  
岩村武勇(編)1973『四国遍路の古地図』KK出版  
沖野舜二 1960『新野町民史』 新野町史編纂委員会  
喜多村信節 1980(1832以降)「筠庭雜録」岩本活東子(編)『続燕石十種』第2巻,  
中央公論社  
喜代吉榮徳 1995『四国辺路研究』第6号, 海王舎  
吉良哲明 1959『原色日本貝類事典』(改訂版) 保育社  
『高知県人名事典 新版』刊行委員会(編)1999『高知県人名事典』(新版) 高知新聞社  
小林淳宏 1900『定年からは同行二人』PHP 研究所  
近藤喜博(編)1973『四国霊場記集』勉誠社  
近藤喜博(編)1974『四国霊場記集別冊』勉誠社  
佐々木馬吉 1980『窪川のみほとけ』土佐光原社  
新城常三 1982『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房  
真野俊和 1991『日本遊行宗教論』吉川弘文館  
高野義夫(翻刻)1979『十返舎一九全集』第3巻, 図書刊行センター  
高群逸枝 1979(1918)『娘巡礼記』(堀場清子校訂) 朝日新聞社  
高群逸枝 1938『お遍路』厚生閣  
武田明 1969『巡礼の民俗』岩崎美術社  
田中智彦 1989「四国遍路絵図と弘法大師図像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻, 地人書房, 239-256  
近松全集刊行会(編)1988『近松全集』第9巻, 岩波書店  
津村庵淙 1969(1795)「譚海」原田伴彦他(編)『日本庶民生活資料集成』8, 三一書房  
寺田傳一郎 1976(1934)「弘法さまのお授け」『郷土研究』復刻版第6巻, 名著出版, 490-492  
『徳島県那賀郡福井村誌』1956(阿南市立図書館所蔵)  
波部忠重・小菅貞男(共著)1967『標準原色図鑑全集3 貝』保育社  
錦仁 2001『浮遊する小野小町』笠間書店  
西端さかえ 1964『四国八十八札所遍路記』大法輪閣  
日本古典文学大辞典編集委員会(編)1983~1985『日本古典文学大辞典』岩波書店  
野間光辰(監修)1973『翻刻絵入狂言本集 上』般庵野間光辰先生華甲記念会  
藤山正二郎 1991「犠牲の物語の神話作用」波平恵美子(編)『伝説が生まれるとき』

福武書店 161-187

福田アジオ他(編)1999～2000『日本民俗大辞典』上・下, 吉川弘文館

福田晃他(編)2000『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社

星野英紀 2001『四国遍路の宗教学的研究』法蔵館

松浦武四郎 1975 (1844)「四国遍路道中雑誌」吉田武三(編)『松浦武四郎紀行集』  
中, 富山書房, 151～338

道空間研究会 1994『現代社会と四国遍路道』早稲田大学文学部

宮尾しげを 1943『画と文 四国遍路』鶴書房

森實臣 1993『ふるさと福井の昔話』福井公民館

宮田登 1971『ミロク信仰の研究』未来社

柳田国男 1998 (1929)「大師講の由来」『柳田国男全集』第4巻, 筑摩書房, 348-  
364

山折哲雄他 1991『巡礼の構図』NTT 出版

※インターネット (URL は 2001 年 11 月 30 日現在)

- ・(財)河川情報センター マンスリー・インフォメーション 1999 年 8 月号「水生生物による簡易な水質調査法の見直しについて」『River NET』  
<http://www.river.or.jp/kawa/mi9908/p20.html>
- ・窪川町役場「窪川民話の里めぐり その4 岩本寺の七不思議」『アユちゃんのしまんと窪川探検隊』  
<http://www.kubokawa.gr.jp/mukashi4.html>
- ・佐久商工会議所「おもしろ発見! 佐久のまち1」『信州佐久平-エコ・シティを目指して』  
<http://www.sakucci.or.jp/hakken/hakken01.html>
- ・福井県福祉環境部自然保護課「福井県産淡水生貝類リスト 1. イシマキガイ」  
『福井県みどりのデータバンク』  
[http://www.erc.pref.fukui.jp/gbank/fr\\_shell/fr\\_shell\\_1.html](http://www.erc.pref.fukui.jp/gbank/fr_shell/fr_shell_1.html)

※なお,「資料(文献にみる鉦打・窪川の記載の有無)」でのみとりあげた文献に関しては省略した。